

優秀賞

## 失敗という名の妥協

鹿児島県立大口高等学校 2年 松元 きらら

『中学三年生の思い出』、皆には有って、私には無いものだ。これからどんなに努力しようとも一生手に入らない、既に売ってしまった一点物である。

私は中学二年生の終わりから卒業するまで学校に行っていない。決して誇れることではないし、堂々と胸を張って言えることでもない。所謂、失敗だった。中学三年生と言われて思い出すのは、将来に悩み腕き苦しむ自分の姿だけで、高校に入ると決めてからは授業を受けていない範囲を含めた骨を刻むような受験勉強に何度も挫折しそうになった。それでも私が諦めることなく勉強を続けて高校に入学し、今現在しがないながらも高校生活を送れているのは、『妥協と努力は共存する』という事実を身を以て学んだからである。

中学三年生の春も暮れようとしていた頃、私は人生を変えてくれた人と出逢った。隣の適応指導教室の先生だった。その頃、自分の全てに自信が無かった私の、ふとした笑顔を好きだと褒めてくれる先生だった。その先生のおかげで高校に行くことを決意し、猛勉強を始めた私だったが、たまに行き詰まってしまふことがあった。元々努力というプレッシャーに弱かった私は、自分のキャパシティを超えてしまふことが幾度かあったのだ。そんな時、先生は必ず温かいお茶とミルク味の飴を差し出して、『何もしない時間』を提供してくれた。頑張らなくていいことを教えてくれたのだった。もちろん、手抜きを許す訳ではない。メリハリが大事だということを教えてくれた。おかげで、自分でも少しずつ妥協と努力の配分が上達した私は、見事受験に成功することが出来たのであった。

私は不登校という失敗を通じて、妥協と努力の両立を学んだ。緩があるから急があるように、妥協があるから努力が成功するのだと私は思う。そして私はこの失敗を全く後悔していない。きっとこの失敗は人生という長い道においての『妥協』なのだから。